

書名：被抑圧者の教育学

著者：パウロ・フレイレ

- ① 訳者：小沢有作，楠原彰，柿沼秀雄，伊藤周
出版社：亜紀書房 出版年月：1979年5月
総ページ数：324ページ ISBN：4750579076



書名：状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加

- ② 著者：ジーン・レイヴ，エティエンヌ・ウエンガー
訳者：佐伯胖 解説：福島真人
出版社：産業図書 出版年月：1995年1月
総ページ数：204ページ ISBN：4782800843

推薦者

高橋眞琴

鳴門教育大学院准教授
特別支援教育専攻

～学校教育について再考するために、一度手にとっていただきたい書籍～

皆さんは、学校教育について、どんなイメージをもっているだろうか。教員が教壇に立ち板書を行い、児童・生徒が着席して静かに授業を受け、時には、挙手する姿が多いのではないだろうか。今回は、いささかクラシカルであるがお勧めの書籍2冊を取り上げたい。私は、公立学校の英語科教諭経験があり、生徒の英単語や文法の定着を図るために、リーディングやパターン・プラクティス、ライティングを繰り返し授業で行ってきた経験がある。しかし、特別支援教育の分野に携わるようになってから、「教育」や「学習」とは、何かについて考えるようになった。その頃に出会った書籍がこの2冊であり、インフォーマルラーニングや協同学習の研究につながっている。

まず、フレイレの『被抑圧者の教育学』では、「銀行型教育」を批判する。フレイレが問題提起する「銀行型教育」には、「教師が教え、生徒は教えられる」「教師が学習過程の主体であり、一方生徒はたんなる客体にすぎない」という内容をはじめとする10項目が記されている(p.68)。この「銀行型教育」からは、教員が前に立ち、一方的に授業を行う一斉授業が想起される。このような「銀行型教育」に対して、フレイレは、「課題提起学習」について、述べている。「教師はもはやたんなる教える者ではなく、生徒と対話を交しあうなかで教えられる者にもなる。生徒もまた、教えられると同時に教えるのである。かれらは、すべてが成長する過程にたいして共同で責任を負うようになる。」(p.81)と教師と生徒の対話や学び合いの重要性を説いている。

レイヴとウエンガーの『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』では、「学習のカリキュラムは状況に埋め込まれたもの」(p.80)とする。たとえば、前述の英単語のみを切り離して暗記する行為は、本来の「学習」とは異なるということを示唆している。また、教育実践や活動などの共同体において、新たに参入した教員や実践者がその共同体における知識やスキルを習得し、熟練化されていく過程(正統的周辺参加)は、学校教育における教員の専門性とも密接な関係があるだろう。

大学は、'unlearn'(まなびほぐし)の場であるともいわれる。多様な側面で「教育」や「学習」について考えてみる機会があってもいいかもしれない。

